

「絆」の光と影¹ —「絆」のイメージとその構造に基づく「絆」尺度の作成—

高 木 修 ・ 戸 口 愛 泰

Light and shadow of KIZUNA:
A construction of KIZUNA scale

Osamu TAKAGI and Yoshiyasu TOGUCHI

Abstract

This study examined a cultural phenomenon called “KIZUNA” in attempting to find some solution to social problems (e.g., juvenile crime, bullying, and abuse) that are on the rise. First, descriptions of the word “KIZUNA” were collected and analyzed to get a better understanding of the phenomenon, and 5 categories were confirmed. Second, a mother-child KIZUNA questionnaire was developed based on the categories. 194 subjects completed the questionnaire and, according to the results of factor analysis, 4 factors were extracted. Lastly, concerning the subjects' satisfaction level with relationships, an important characteristic of KIZUNA between mother and child was revealed. That is, affirmative and affective antecedent factors and the awareness of spontaneous stability would increase the satisfaction level of mother-child relationships. Possible explanations for the findings were discussed.

Key words: KIZUNA, Mother-Child Relationship, Attachment, AMAE

抄 録

本研究では、近年増加する社会問題（e.g., 未成年による犯罪, いじめ, 虐待）の原因究明と解決への手がかりを得るために、人と人との「絆」に着目した。まず、「絆」現象を深く理解するために、「絆」についてのイメージや態度に関するステートメントを自由記述法で収集し、それらの内容分析を通じて、5つのカテゴリーを確認した。つぎに、それらのカテゴリーに基づいて母子間の絆尺度を作成し、194名の母子（ペア）を対象に「絆」意識を測定し、その回答を因子分析にかけた結果、4つの「絆」因子が抽出された。これらの意識と関係満足度との関係から、肯定的な情緒的先行要因と自然発生的な安定性認識が母子関係の満足度を向上させることが明らかになった。

キーワード：絆, 母子関係, 愛着, 甘え

1. 本研究は平成16年度関西大学社会学部共同研究費（研究課題「対人関係の光と影」—「絆」の形成）として、助成を受けたものの、成果を公表するものである。本研究の一部は、日本社会心理学会第46回大会（2005）にて発表された。

問 題

近年、少子・高齢化、グローバル化、高度情報化のもと、社会やそれを取り巻く対人関係の様相が大きく変貌している。そのため、増加の一途をたどる犯罪やいじめ、虐待などの社会問題の原因を特定することは容易ではない。本研究では、原因究明と解決への手がかりを得るために、人間関係の中核といえる人と人との「絆」に着目する。

我々は常識として、「絆」についての知識を十分もっていると考えがちであるが、実際それほど理解はしていない。それは、あまりにも当たり前のことであるため、そのことが特別なものとして取り上げられない限り、あらためて深く思いを巡らしてみることがほとんどないからである。

では一体、人と人が「絆」で結ばれるということは、どのような現象を指し、どのような働きをするのであろうか。辞典によれば、それは次のように定義されている：

「断つにしのびない恩愛。離れがたい情実。係累（つなぎしばること。良心を拘束するわずらわしい物事。特に、自分が世話すべき両親、妻子、兄弟など）。繫縛（つなぎしばること）」（広辞苑、第3版）。

「家族・友人などとの結びつきを、離れがたくつなぎとめているもの」（大辞林、第2版）。

「人と人との断つことのできないつながり。離れがたい結びつき」（大辞泉）。

要するに、「絆」とは人と人との断つことのできない情緒的なつながりのことなのである。

心理学の領域において、人と人との親密な関係や信頼関係については、従来からよく研究されてきた。伝統的な精神分析における情緒的な絆の概念（Emotional Bond）も Freud 学派によって導入されている（酒井、2005）。しかし、「絆」自身に焦点を当て、心理学の専門用語として定着させた研究はあまり見当たらない。

他方、「絆」と類似した現象に関する理論、例えば、基本的信頼理論（Erikson, 1963 仁科訳1977）、幼児期の愛着理論（Bowlby, 1969 黒田他訳 1977）、アダルトアタッチメント理論（Bartholomew & Perlman, 1994; Feeney & Noller, 1996; Sperling & Berman, 1994）、社会的コントロール理論（Hirschi, 1969 森田・清水訳 1995；小林, 1993；斉藤, 2002）、世代のむすびつき理論（北村・武藤, 2001；水野－島谷, 2002）などは、人々とあるいは社会との結びつきについて有用な知見を蓄積してきている。しかし、繰り返しになるが、「絆」それ自身を正面から取り扱った研究は少なく、明確な学問的定義すら提案されていないのが現状である。したがって、「絆」現象を概念化する作業が我々の研究の第一歩と

考える。

そのために、類似概念の中でも包括的、かつ汎用的に用いられている愛着理論にまず注目する。そもそも愛着とは、養育者と子どもの間（主に母子間）に相互的かつ情緒的な結びつきが形成されることであり、幼児が示す養育者（i. e., 母親）への後追いや、養育者が見えなくなると泣き叫び、探索するといった行動がSSP（Strange Situation Procedure）やQ分類法（AQS）を用いて検討されてきた（柏木, 2003）。この養育者と子どもの間の結びつきは、動物とも共通し、Harlowのアカゲザル実験では、皮膚上の接触経験が結びつきにおいて重要な役割を担うことが示されている（高橋, 1984）。その他の特徴として、一度形成された愛着は時間と空間を越えて持続すると考えられており（山口, 1994）、また、情緒的な結びつきが親子関係の中で成立していれば、子どもの情緒は安定し、子どもの「思いやり」や「自発性」が発達するとも指摘されている（平井, 1994）。同様に、環境要因や気質的要因から影響を受けるとしても、幼児期に形成された愛着は、ある程度の時間的連続性をもつと理解されており（遠藤, 2003）、その経験的知見がアダルトアタッチメント理論の基盤となっている。これらは、「絆」現象を取り扱う上でも興味深い知見である。

しかしながら、必ずしも幼児期の愛着が容易に形成される訳ではない。養育者からの愛情に満ちた働きかけが不適切な場合や断ち切られた場合には、愛着障害という形で子どもに対して心身上の障害を与える可能性もある（品川, 1992）。愛着関係が不形成であることが原因とまでは断定できないが、厚生労働省（2003）が取りまとめた資料によると、平成15年度の児童相談所における虐待相談の処理件数は26569件であった。相談の種類別では、身体的虐待が12022件（45%）、性的虐待が876件（3%）、心理的虐待が3531件（13%）、そしてネグレクトが10140件（38%）。全体の65%において実母または実母以外の母親が虐待の「加害者」となっており、その実数は17173件（内471件は実母以外）であった。ただし、愛着障害への対応策も提案されている。そこには、子どもへの愛情ある接触やはたらきかけをする人が一定期間子どものそばにすることが推奨されている。この過程から基本的信頼、つまりは愛着を（再）形成していくことが示唆されているのは留意すべき点である（品川, 1992）。

「絆」との類似性をもつと考えられる愛着ではあるが、文化を超えた普遍性については多少の疑問もあげられている。上述のSSPにより子どもの愛着の質をタイプ別に分類すると、安定型のBタイプが比較的望ましいとされ、このタイプに類別される幼児が国際的にも最も多いのだが、ドイツでは回避型のAタイプ、日本では不安定型のCタイプも同様に

多く類別されている（柏木，2003）。Aタイプの幼児は，母親の動向に影響を受けにくく，Cタイプの幼児は，母親との分離によって泣き出したり，ぐずったりする特徴をもつ。これは，それぞれの国での母子関係としつけに関する文化的規範の違いが愛着形成において重要な役割を担っていることを示唆している。同様に，対人関係における関係性をめぐる発達の知見にも文化差が生じているが，これは，関係性をその「量と重要度」によってではなく，その「質とダイナミックス」において解釈する必要性を示唆している（Rothbaum, Pott, Azuma, Miyake, & Weisz, 2000）。つまり，関係性発達において人類間に共通する部分はもちろん存在するが，欧米による民族中心的な解釈だけでは土着文化の特殊性やその影響力を見過ごしてしまう危険性を唱えているのである。特に日本の幼児における「甘え」の役割には特筆すべきものがあり，愛着形成に多大なる影響を与えられている（Rothbaum, Weisz, Pott, Miyake, & Morelli, 2000）。

では，他者との間に愛着を形成することが「絆」関係を構築することと同義なのであるか。また，「絆」を日本独自の愛着形成として概念定義することが「絆」現象を理解することなのであるか。それらの疑問も含め，現段階において不可解な要素を含む「絆」のダイナミックスを探求することが緊要の課題といえよう。具体的には，「絆」とは一体何を指し示し，どのような役割を担っているのかを探求する必要がある。また，当然のごとくプラス面の存在が期待されている「絆」ではあるが，マイナス面が内在する可能性も考えられる。「絆」にはアンビバレントな意味が含まれており，特に昨今では「しがらみ」や「息苦しさ」といった個人や組織の自由が「絆」によって束縛される否定的な側面も強調されている。このことは，「絆」が「ほだし」という読み方をもつことから容易に推察できる（伊藤・宮下，2004）。さらには，愛着形成と同じように，絆形成には絆を結ぶことができる重要他者が必要であり，その相手を異にして結ばれる絆の質は「絆の関係性」を理解する上で重要な情報となり得るであろう。これらの要素も検討課題に含めることで，より一層「絆」のダイナミックスの解明に近づけると考える。

そこで，本研究では，まず，①人々が「絆」について抱いているイメージや他者と絆で結ばれることに対する態度を自由記述法による調査で収集し，これらを内容分析することによって，「絆」の構造を解明する。つぎに，②その構造に基づいて，絆で結ばれることに対する態度を測定する尺度を作成する。さらに，③絆関係が仮定される二者関係，特に，母子関係における絆態度と関係満足度との関連性を検討する。これらの分析を通じて，今日的な「絆」のあり方とその功罪に接近することを目的とする。

研究 1

目 的

絆で結ばれることに対する態度を測定する尺度の作成に向けて、絆についてのイメージと絆で結ばれることに対する態度の具体的な意見ステートメントを収集する。

方 法

1. 被調査者

関西圏の私立K大学の心理学系講義を受講する大学生に、学生自身とその親族や友人に対する調査を依頼した。学生には、2～3票の調査票を持ち帰らせ、後日回答済みの1～3票の調査票を回収した。記入漏れのある調査票を除き、その上で、回答者の年齢と婚姻状況にしたがって、30歳以上の大人群（33歳～74歳、既婚）と30歳以下の青年群（16歳～28歳、未婚）にそれらを分割した。人数（性別内訳、平均年齢と標準偏差）は、前群が72名（男性24名、女性48名、平均年齢は50.3歳、 $SD=6.2$ ）、後群が194名（男性79名、女性115名、平均年齢20.9歳、 $SD=1.7$ ）であった。

2. 調査票の構成（質問内容）

「絆」という語を示し、これはどういうものか、どのようなことが「絆」なのかをできるだけ多く具体的に記述することを求めた（目的①に該当）。さらに、絆関係では、絆を形成する相手が必要であり、その相手によっては絆関係の強さも質も異なることが考えられるので、様々な続柄の人との「絆」関係には、一般に、どのようなプラス面とマイナス面が、どの程度含まれていると思うかを、「含まれている」（5点）から「含まれていない」（1点）までの5件法で回答することを求めた。

結 果

1. 記述内容の分類

大学生本人と社会人としてその親族・友人に回答を依頼したが、本人の他に、友人や親、親戚の回答が混在していたことから、前述のように、既婚の大人群と未婚の青年群とに分け、それぞれの群ごとにKJ法（川喜田、1967）を用いて記述内容の分類を行った。分類・確認作業は、社会心理学を専攻する大学院生3名（大学院博士課程後期課程在学中の1名、同前期課程在学中の1名、同前期課程修了の1名）が実施した。2つの群から得られた総

記述（票）数は、同じ記述も含め869票であった（大人群254票、青年群615票）。

分類後の抽出カテゴリーは、大人群、青年群ともに5カテゴリーであり、2群間にカテゴリー内容の類似が見られた。各カテゴリーの概要を以下に、その詳細をTable. 1に記す。なお、以下の見出しカテゴリーは、複数の下位カテゴリーからなる上位カテゴリーを意味し、大人群と青年群における票数の内訳は、群内の割合（%）で示した。また、下位カテゴリーには、実際の票数を付記した。

A. 絆関係に伴う情緒（大人群31.1%、青年群26.2%）

大人群：絆関係に伴う情緒を表す記述であり、その反応数を集計した結果、「信頼」（32票）が最も多く、これに「愛情」（25票）と「思いやり」（10票）が続き、その他に、「尊敬」（3票）や「安心感」（3票）などの正の感情も含まれていた。逆に、「愛憎」（1票）や「憎しみ」（1票）といった負の感情の記述も少数ながら見受けられた。

青年群：大人群と同様に、絆関係に伴う情緒を表す記述であり、「信頼」（70票）が最も多く、これに「友情」（24票）と「愛情」（23票）が続き、その他に、「思いやり」（17票）や「安心感」（8票）などの正の感情も含まれていた。逆に、「時には煩わしい」（2票）といった絆関係を構築する上での負の側面も見られた。

B. 絆関係自身の特性イメージ（大人群34.6%、青年群45.4%）

大人群：絆関係自身の特性イメージを表す記述であり、絆関係を「つながり」（16票）、「結びつき」（10票）、「縁」（8票）のように人と人とが結びついているものと捉えながら、それが「切れない」（15票）や「見えない」（5票）ものとして認識している。逆に、「どろどろした」、「強いと難しい」、「切れやすい」といった負のイメージ（計5票）も見られ、絆のアンビバレントさが窺える。また、「損得なし」（6票）や「自分では選べない」（3票）といった記述も含まれていた。

青年群：絆関係自身の特性イメージを表す記述であり、大人群と同様に、絆関係を「つながり」（56票）や「結びつき」（29票）のように人と人（あるいは物や心）がつながれているものと捉え、そのつながりが「切れない」（46票）もの、「大切」（16票）なもの、「強い」（13票）ものとして認識している。さらに、「見えない」（28票）ものといった視覚的な捉え方や、「距離や時間による影響がある（ない）」ものなど、ある種、具現化した形態で理解している記述もあった。なお、大人群では記述のなかった「永遠」（10票）が確認されたように、青年群においては母親との絆は不変的なものかも知れない。しかし、「修復が難しい」や「壊れやすい」などの負のイメージ（計7票）も確認され、強く切れない絆関係だけではなく、絆を構築する対象や絆の種類によって内容が変わることが窺えた。

C. 絆関係が成立する場（大人群14.2%，青年群8.9%）

大人群：絆関係が成立する場を表す記述であり、「血縁」（15票）、「家族」（13票）、「友人を含む具体的な関係」（8票）で構成されている。

青年群：大人群と同様に、絆関係が成立する場を表す記述であり、「家族」（19票）、「血縁」（12票）、「恋人」（3票）などが、また、「人間関係」、「親密な関係」、「切れない関係」といった抽象的な「関係性」（計25）についての記述も見られた。

D. 絆関係の有り様（大人群17.3%，青年群17.6%）

大人群：絆関係の有り様を表す記述であり、「相互」（9票）、「受容」（8票）、「援助」（4票）といった相手と一体感を持ち、助け合うといった記述が見られた。また、「苦楽を共にする」（5票）、「同じ目標をもつ」（6票）、「共に住む」（4票）といった大人群特有の共通運命的な記述も認められた。

青年群：大人群と同様に、絆関係の有り様を表す記述であり、「理解」（12票）、「援助」（17票）、「相互」（17票）といった相手を理解し、助け合うなどの記述が見受けられた。さらに、「コミュニケーション」（11票）や「言葉が不要」（11票）のように本音でつきあうことができ、以心伝心が可能な関係と捉えていることも分かった。

上述の「B. 絆関係自身の特性イメージ」カテゴリーとの違いは、Bは絆関係のある種の現象ととらえ、そのイメージを表現するものであるのに対し、Dは絆で結ばれている人の間の関係性の有り様を表しており、絆が関係性へ与える影響や性質についてであると解釈することができる。

E. 絆関係と自己の関わり方（大人群2.8%，青年群2.0%）

大人群：絆関係を自己の関わり方の側面から記述したものであり、「他者優先」（7票）で構成される。「自己」カテゴリーではあるが、大人群においては、他者への配慮を示す上で自己の存在を認識していることが窺える。

青年群：大人群と同様に、絆を自己の関わり方の側面から記述したものであり、「自己中心性」（7票）と「他者優先」（5票）が含まれている。前者では、絆関係とは自己の思い込みや自分次第であると述べ、後者では、絆関係には自己犠牲や利他性が伴うことが示されている。前者の自己中心性は青年群にのみ顕著に示されていた。

以上のように、カテゴリー内容は両群間で類似していたため、同じカテゴリー名を使用した。大人群の記述には、青年群よりも、実際の経験に基づいた内容が多く含まれていた。そのことから、絆で結ばれる可能性のある関係性（e.g., 夫婦、家族）の経験値が、絆の実態を捉える上で、またデータの信頼性を高める意味で重要であることが示唆された。

2. 絆関係のプラス面とマイナス面

河合(1980)が、夫婦間の絆(横の絆)と親子間の絆(縦の絆)では性質が異なることを指摘しているように、絆関係と一概にいてもその「関係対象」によってその関係の強さや質は異なり、またその関係のプラス面とマイナス面についての認識も異なると考えられる。

そこで、本研究では、種々の関係性における絆関係のプラス面とマイナス面の存在する可能性をFigure. 1のように分析した結果、ほとんどの関係において絆関係の両面性が示された。すなわち、青年群では、全関係においてマイナス面よりプラス面の得点が有意に高かった(上司・部下と神様・仏様は $p<.01$, 残りは全て $p<.001$)。大人群では、上司・部下, 先輩・後輩, 同僚間, 地域社会を除く関係全てにおいてプラス面とマイナス面の間に有意差が認められ、プラス面がマイナス面を上回っていた(親戚は $p<.01$, 神様・仏様は $p<.05$, 残りは全て $p<.001$)。

大人群においては、プラス面とマイナス面が相殺される(つまり有意差がない)関係も存在することから、絆関係が全ての関係対象において肯定的であるとはいえないことが示唆された。しかし、大人が認識している絆関係と青年が認識するそれが意味的に異なると結論するにはさらなる研究が必要であろうが、青年の希求する絆関係では、マイナス面の存在を認めてはいるもののプラス面への偏りがあることが示された。これは、彼らが経験にあまり裏打ちされていない絆を単に想像しているためなのかも知れない。いずれにしても、これは、今後の重要な課題になろう。

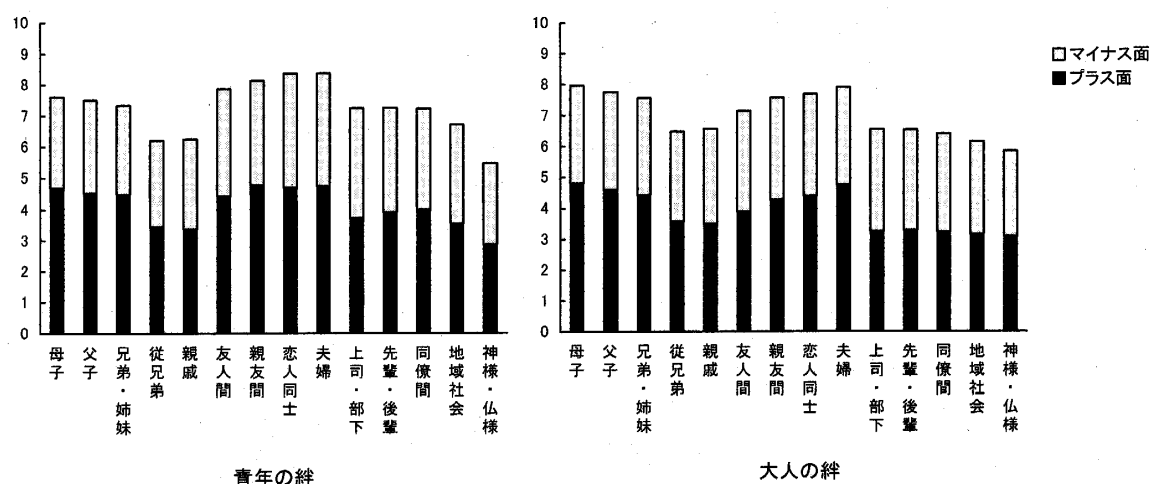


Figure. 1 青年と大人の絆の可能性 (プラス面・マイナス面)

考 察

研究1の結果、人々のもつ「絆」についての一般化されたイメージが5つのカテゴリーに分類でき、それらの内容から「絆」には負の側面も存在することが、また、関係性によっては「絆」のプラス面とマイナス面の有り様が異なることが示唆された。

記述内容に青年群と大人群の差異が見られたが、それらは、「絆」の経験値の違いを反映していると推測される。この経験値の違いとは、既婚者で、かつ、大半が子どもをもつ身である大人群において、自らの働きかけから絆関係を能動的に構築してきた経験が青年群と比べて相対的に豊富であると想像されるところである。一方、青年群は未婚であることから、最も身近な絆対象は親・兄弟と考えられ、その存在が当然のこととされる受動的な絆関係しか経験していない可能性が高い。分類結果のカテゴリーでは、両群間に大きな違いはなかったが、今後さらに詳細に検討する必要があると考える。

このことに加えて表面化した疑問は、絆関係を一般化することに対する有用性である。絆関係は、多様な関係性ごとに構築されるものであり、絆関係の意味合いも異なるだろう。ならば、関係性や特定他者によって異なるものについて一般化の意義はあるのであろうか。さらに、反面、絆の対象者を特定し、その関係性における絆の有り様を取り扱わなければ、調査で回答をする側も実際の態度やイメージを浮かび上がらすことが難しいのも現実であろう。

それらの点を踏まえ、研究2では、研究1で示された一般的な絆関係についてのイメージや絆で結ばれることに対する態度に基づいて、様々な関係性に対応しうる絆関係測定尺度を作成する。絆関係とは、絆を結ぶ相手がいてはじめて成立する現象であることから、二者関係を最小単位として絆関係を捉え、それぞれの二者間における絆関係のダイナミックスを検討する。

研 究 2

問 題

絆関係のダイナミックスを理解するために、研究1で得られた5カテゴリーをもとに、それらをFigure.2のように概念化した。

まず、絆関係の現象を捉える上で、その前提として、絆関係を結ぶ他者が必要であり、そこには二者以上が存在する複合的な関係性が成立することになる。関係性ごとに異なる絆関係が存在する訳であるが、それぞれの絆を「強い」、「弱い」、「細い」、「太い」などと表現することは、換言すれば、絆関係の有り様を、さらには、それを通じて絆で結ばれて

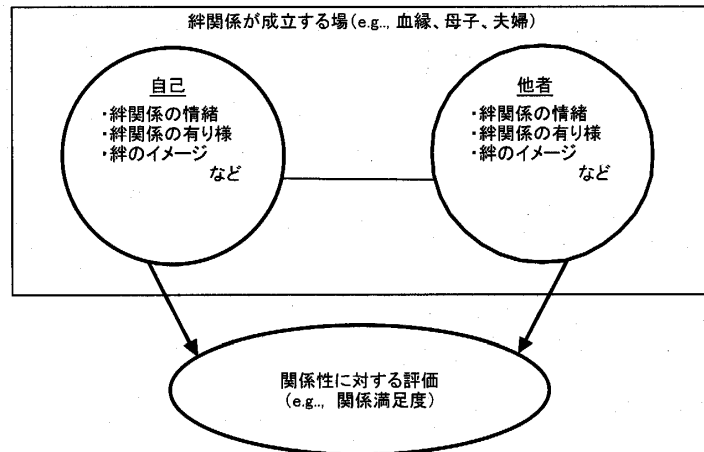


Figure. 2 「絆」の概念図

いる相手を理解しようとすることに他ならない。

絆関係に肯定的なイメージを抱くことは、相手との関係性を肯定的に評価しているのだろう。また、絆関係に対する情緒性も、関係を結ぶ相手に対する当事者の情緒を表していると考えることができる。さらに、絆とは、絆を結ぶ相手がいてはじめて成立する現象であることから、二者間で関係のあり方に関する共通認識が重要であると考えられる。どちらか一方が相手との絆関係に満足していても、もう片方が不満足、あるいは、絆を負担と思っているならば、二者間の関係性についての満足度はおのずと低くなるだろう。つまり、絆関係への双方のイメージや情緒に基づいて、関係性自体の満足度を検討することに意味があると考ええる。

絆関係とは、あらためて意識しないとその存在に気づかないほど、その存在が当然である場合が多く、調査対象として、相互に絆の存在に自信のある関係である必要がある。特に、親子関係は運命的に決定づけられており、子に生まれてくる選択権はない（河合，1980）。また親も子どもを多くの中から選択できるわけではなく、必然的に絆意識を持ちやすい関係といえるだろう。

以上のことから、研究2では、絆関係が当然のことと想定される関係性（e.g., 母子関係）に焦点を当て、まず、二者間の絆関係に対する態度を測定する尺度を作成し、その上で、二者間の絆関係に対する態度が関係性自体の満足度に及ぼす影響を検討する。

目 的

母子関係に焦点を絞り、まず、研究1で得られたカテゴリーをもとに、絆に対する態度

の測定尺度を作成する。つぎに、絆関係に対する態度が母子関係に及ぼす影響を探索的に検討するため、対応した母子データに基づき、母子それぞれの絆への態度と自分たちの関係についての満足度との関連性を検討する。

方 法

1. 被調査者

関西圏の私立K大学とO大学の心理学系講義の受講生120名（男性30名、女性89、不明1名）とその母親74名に調査を依頼した（2005年4月下旬・7月下旬）。学生の平均年齢は20.48歳（ $SD = 1.75$ ），レンジは18-32歳，平均の兄弟数は2.38人（ $SD = 1.03$ ），レンジは0-6人，家族との同居者は120名中87名（不明1名）であった。母親の平均年齢は50.33歳（ $SD = 4.47$ ），レンジは42-61歳，平均の兄弟数は2.81人（ $SD = 1.22$ ），レンジは0-6人，平均の子ども数は2.47人（ $SD = .82$ ），レンジは1-5人，大学生の子どもとの同居者は74名中64名（不明1名）であった。なお，親子ペアデータを用いる際には，記入漏れなどを除いた73組（学生の性別内訳は，男性16名，女性56名，不明1名）を対象とした。

2. 質問紙の構成（質問内容）

質問紙は，母子間絆尺度と母子関係満足度尺度から構成されている。

(1)母子間絆尺度：母子それぞれが絆で結ばれることに対して抱いている態度を測定するために，研究1のKJ法の結果の5カテゴリー（絆に伴う情緒，絆関係自身の特性イメージ，絆関係が成立する場，絆関係の有り様，絆関係と自己の関わり方）から票数の多い記述や重要と思われる記述をもとに48項目を選定した（Table. 2）。そして，それぞれの項目の内容が自分の考え方に該当するかどうかを，「とてもそうである」（6点）から「全くそうでない」（1点）までの6件法で回答することを求めた（目的②に該当）。

(2)母子関係満足度尺度：母子関係性に対する子どもと母親の満足度を測るために，金政・大坊（2003）を参考に5項目を作成した。そして，それぞれの項目の内容が自分たちの関係について該当するかどうかを，「とてもそうである」（6点）から「全くそうでない」（1点）までの6件法で回答することを求めた（目的③に該当）。

Table. 2 「絆」尺度の項目（全48項目）

項 目	上位カテゴリー
1) () とは絆で結ばれているので、安心だ。 2) () と絆で結ばれるのには、思いやりが必要である。 5) () との絆には、時に憎しみが伴う。 6) () との絆は、失いたくない。 10) 私には、() との絆が必要である。 12) () と絆で結ばれるのには、信頼が必要である。 20) () と絆で結ばれるのには、愛情が必要である。 25) () と絆を築くには、() を尊敬することが大事である。 26) 絆で結ばれている () に、無償の愛は必要ない*。 30) () との絆に、やさしさはとくに必要でない*。 36) () との絆は、時にわずらわしいものになる。 39) () との間に絆があると、嬉しい。 40) () と絆で結ばれていると、幸せである。 44) () との絆には、友情的なものは必要ない*。	絆関係が伴う情緒
3) () との絆は、() とのつながりそれ自身である。 4) () と絆を築くには、時間がかかる。 8) () と離れて住んでいても、絆は切れない。 9) () との絆は、時に不安定なものになる。 11) 一度壊れた () との絆は、修復しにくい。 14) () との絆は、切りたくても切れないものである。 17) () との絆は、強いものである。 18) () との絆は、とくに大切なものではない*。 24) () と絆を築くには、努力が必要である。 27) () との絆は、もろいものである。 29) () との絆は、() との結びつきそのものである。 31) () との絆は、宿命的なものである。 37) () との絆には、時に損得が関係してくる。 38) () との絆からは、逃げられない。 43) () との強すぎる絆は、厄介である。 45) () と長い間会えないと、絆は切れてしまう*。 46) () との絆は、いつの間にか自然にできているものである。 47) () との絆は、目には見えないものである。 48) () との絆は、意図的に作ろうとするものではない。	絆関係自身の特性のイメージ
16) 絆とは、血縁関係のことである。 35) 親子間には、絆が自然と存在する。 41) 兄弟姉妹間には、絆ができない。	絆関係が成立する場
7) () と絆で結ばれることと同じ目標をもつことは別である。 13) () と絆で結ばれているので、心が通じ合う。 15) 絆で結ばれている () のためなら、自己犠牲もいとわない。 21) () との絆は、心の支えになる。 22) () と絆で結ばれていると、困難も乗り越えられる。 23) () と絆で結ばれていると、一体感を感じる。 33) 絆で結ばれている () なら、束縛されてもよい*。 34) () との絆には、お互いを理解することが必要である。 42) () と絆で結ばれるためには、助け合うことが必要である。	絆関係の有り様
19) () との絆など、単なる思い込みでしかない。 28) () との絆は、時に一方通行的なものになる。 32) () との絆は、自分次第でいくらでも変わる。	絆関係と自己の関わり方

註1) *の付いている項目は逆転項目を示す。

註2) 括弧内には絆の対象（母親・子供）が記載され、母親と子供で項目を共通化した。

結 果

1. 尺度の構造解明

学生（以後は子どもと記述）とその母親の計194名から得られた(1)の母子間絆尺度の評定データに基づき因子分析（主因子法，プロマックス回転）²を行った。その結果，“絆で結ばれていると，幸せである”，“絆があると，嬉しい”，“絆は，心の支えになる”，“絆で結ばれていると，困難も乗り越えられる”といった絆がもたらすポジティブな効果と，“結ばれるためには，助け合うことが必要”，“愛情が必要”，“信頼が必要”，“尊敬することが大事”，“お互いを理解することが必要”，“思いやりが必要”といった絆を構築する上で必要なことを示す12項目からなる「情緒的な先行要件と効用」因子（ $\alpha = .86$ ），“絆は，時にわずらわしいものになる”，“時に憎しみが伴う”といった絆の否定的情緒側面と，“絆は，時に不安定なものになる”，“一方通行的なものになる”，“自分次第でいくらでも変わる”といった絆の不安定な側面とを示す8項目からなる「否定的・不安定性」因子（ $\alpha = .77$ ），“絆は，いつの間にか自然にできているもの”，“意図的に作ろうとするものではない”といった絆の自然発生的な特性と，“長い間会えなくても切れないもの”，“離れて住んでいても切れない”といった絆の安定性を示す5項目からなる「自然発生的・安定性」因子（ $\alpha = .73$ ），そして，“絆からは逃げられない”，“絆は宿命的なもの”，“切りたくても切れないもの”といった絆のつなぎ縛るという特性を示す4項目からなる「繫縛性」因子（ $\alpha = .67$ ）の4因子が抽出された（Table. 3）。なお，(2)の母子関係満足度尺度については，尺度の1次元性を仮定し，信頼性の検定を行った結果， $\alpha = .88$ と十分な信頼性が確認された。また，尺度(1)の適合度を検討するために，4因子構造での確認的因子分析³を実施した結果，妥当な解が得られた（GFI=.93, CFI=.95, RMSEA=.06）（Dilalla, 2000）。

2. 絆態度と関係満足度の関係およびそれらの母子間世代差

つぎに，親子のペアデータを用いて，絆尺度の下位因子（態度）得点と関係満足度における母子間の差を検討すべく，ペアデータ間の t 検定を行った（従属変数：下位尺度平均値）。その結果，「否定的・不安定性」因子（ $F(1, 70) = 1.54, p < .05$ ）と関係満足度（ $F(1, 70) = 2.67, p < .05$ ）において統計的に有意な世代差が，「繫縛性」因子（ $F(1, 72) = 1.90, p < .10$ ）においては有意傾向差が認められた。すなわち，「否定的・不安定性」因子では，母親（ $M = 3.06$ ）と子ども（ $M = 3.31$ ）の双方が絆の否定的・不安定性を幾分否定する傾向が見られ

2. 親子間に共通の因子構造が存在するとの前提のもと，母親群と子ども群を複合した因子分析を行った。

3. 被験者を増やし，群ごとの因子構造を検証すべく，多母集団による確認的因子分析が今後必要といえる。

Table. 3 「絆」尺度の因子分析の結果

質 問 項 目	F1	F2	F3	F4	共通性
40) ()と絆で結ばれていると、幸せである。	.74	-.15	-.09	.12	.60
39) ()との間に絆があると、嬉しい。	.72	-.10	-.02	.11	.58
42) ()と絆で結ばれるためには、助け合うことが必要である。	.64	.20	-.07	.12	.36
21) ()との絆は、心の支えになる。	.63	-.17	-.02	.04	.51
22) ()と絆で結ばれていると、困難も乗り越えられる。	.62	-.30	-.24	.09	.65
20) ()と絆で結ばれるのには、愛情が必要である。	.61	.05	.06	-.07	.36
12) ()と絆で結ばれるのには、信頼が必要である。	.61	.29	.14	-.18	.39
25) ()と絆を築くには、()を尊敬することが大事である。	.58	.13	-.08	.06	.27
10) 私には、()との絆が必要である。	.57	-.12	.03	.01	.45
34) ()との絆には、お互いを理解することが必要である。	.54	.15	.02	-.06	.23
2) ()と絆で結ばれるのには、思いやりが必要である。	.50	.22	.20	-.31	.33
13) ()と絆で結ばれているので、心が通じ合う。	.45	-.23	-.19	-.01	.39
36) ()との絆は、時にわずらわしいものになる。	-.04	.77	-.03	.13	.50
9) ()との絆は、時に不安定なものになる。	.21	.63	-.04	.00	.39
28) ()との絆は、時に一方通行的なものになる。	.03	.60	-.08	.17	.41
5) ()との絆には、時に憎しみが伴う。	-.06	.54	.05	.23	.33
43) ()との強すぎる絆は、厄介である。	-.15	.51	-.11	-.01	.35
32) ()との絆は、自分次第でいくらでも変わる。	.28	.48	.13	-.18	.17
11) 一度壊れた()との絆は、修復しにくい。	.11	.45	-.19	-.18	.27
37) ()との絆には、時に損得が関係してくる。	-.07	.44	-.25	.09	.30
46) ()との絆は、いつの間にか自然にできているものである。	-.05	-.01	.65	.01	.32
48) ()との絆は、意図的に作ろうとするものではない。	-.18	-.14	.62	-.06	.17
47) ()との絆は、目には見えないものである。	-.07	-.01	.59	.09	.27
45) ()と長い間会えないと、絆は切れてしまう*。	-.23	.09	-.55	-.05	.52
8) ()と離れて住んでいても、絆は切れない。	.22	-.10	.41	.17	.48
38) ()との絆からは、逃げられない。	.03	.23	-.06	.73	.45
31) ()との絆は、宿命的なものである。	-.02	.14	.28	.55	.39
16) 絆とは、血縁関係のことである。	.03	-.03	-.04	.51	.28
14) ()との絆は、切りたくても切れないものである。	.13	-.04	.23	.43	.40
因子寄与	6.16	2.28	1.78	1.28	
寄与率	21.36	29.23	35.35	39.78	
因子間相関 (F1)		-.48	.32	.19	
因子間相関 (F2)			-.13	-.10	
因子間相関 (F3)				.21	

Table. 4 要因間の相関係数

下位尺度名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 情緒的な先行要件と効用 (母)	—	-.42**	.34**	.25*	.55**	.27*	-.35**	.22	-.04	.25*
2. 否定的・不安定性 (母)		—	-.25*	-.07	-.32**	-.29*	.10	-.25*	.04	-.31**
3. 自然発生的・安定性 (母)			—	.10	.32	.16	-.16	.22	.02	.32**
4. 繫縛性 (母)				—	.01	.10	-.11	.10	.10	-.04
5. 関係満足度 (母)					—	.19	-.40**	.18	-.10	.45**
6. 情緒的な先行要件と効用 (子)						—	-.46**	.35**	.31**	.57**
7. 否定的・不安定性 (子)							—	-.07	.04	-.57**
8. 自然発生的・安定性 (子)								—	.34**	.31**
9. 繫縛性 (子)									—	.01
10. 関係満足度 (子)										—

註: ** $p < .01$, * $p < .05$

たが（値が小さいほど否定的）、母親の方がより一層否定的・不安定性を認識していることが分かった。「繫縛性」因子においても、母親（ $M=4.00$ ）と子ども（ $M=3.76$ ）の双方が絆の繫縛性を幾分認める傾向が見られたが、母親の方が相対的にそれを認めがちであることが分かった。他方、母子関係満足度においては、母親（ $M=4.80$ ）と子ども（ $M=5.03$ ）の双方が高い満足度を示し、相対的に子どもの方がより満足感を抱いていることが判明した。子どもの標準偏差が.71で母親標準偏差が.65であることから、子どもの方が回答傾向に散らばりがあるが、平均点が高いことから、高得点者の多いことが推察できる（母親の26.8%、子どもの47.9%の平均値が5点以上）。これは、関係に非常に満足している子どもが回答してくれたことによるとも考えられる。

母子双方における要因間の関係を検討すべく、相関分析を行った（関係満足度以外は因子得点を使用、Table. 4）。その結果、母親と子どもの関係満足度には正の有意な相関関係（ $r=.447, p<.001$ ）が存在し、お互いが同じような満足感を抱き合っていることが分かった。絆態度と関係満足度の関係についてみると、母子ともに「情緒的な先行要件と効用」因子が関係満足度と正の有意な関係（母： $r=.55, p<.001$ 、子： $r=.57, p<.001$ ）に、また、「否定的・不安定性」因子が関係満足度と負の有意な相関関係（母： $r=-.32, p<.001$ 、子： $r=-.57, p<.001$ ）にあることが、そして「情緒的な先行要件と効用」因子と「否定的・不安定性」因子との間に負の有意な相関関係（母： $r=-.42, p<.001$ 、子： $r=-.46, p<.001$ ）のあることが確認できた。なお、態度間の関係をみると、「情緒的な先行要件と効用」因子と「自然発生的・安定性」因子の間に正の有意な相関関係（母： $r=.34, p<.001$ 、子： $r=.35, p<.001$ ）が確認された。このことは、喜びや愛情が絆構築には必要であるとの考えと、絆は自然発生的にできあがり安定しているとする考えとが母子間（親子間）の絆の共通の「質」であることを暗示していると考えられる。

しかしながら、母子双方において「繫縛性」因子と関係満足度の間に有意な相関が認められず、絆自体の係累性や繫縛性だけでは、関係の満足性が規定されないことが示唆された。なお、子どもにおいてのみ、「繫縛性」因子と「自然発生的・安定性」との間に正の有意な相関関係（ $r=.34, p<.001$ ）が確認されたが、これは、子どもにとって母子間の絆とは努力が必要なものではなく、あくまでも自然に発生し、安定している宿命的なつながりであり、それに縛られることの当たり前さが関係の基盤になっていることを暗示しているのかも知れない。また、子どもにおいては、絆の否定的・不安定な負の側面と関係満足度との間に非常に高い負の相関が認められたことから、少しでも絆がわずらわしいものに変容した途端に関係が悪化する可能性が推察される。絆に対する非現実的な肯定さが危う

く、脆く映ることには興味がある。研究1においても、プラス面に偏った絆を希求する青年像が示唆され、研究2においてもその像が同様に推察できる。

考 察

研究2の結果、母子関係に存在する「絆」の4つの特徴が確認された。それらの因子名には、あえて負の項目側面を逆転せずに用いたが、被調査者の回答からは、否定的側面を「否み」、絆の構築は「難しくない」と肯定視する傾向が見受けられた。また、絆構築に必要とされる肯定的な条件は関係満足度に正の影響を与え、母子関係における肯定的な態度を形成していると考えられる。しかし、母親群とは異なり、子ども群では、自らの働きかけから絆を能動的に構築してきた経験が相対的に少ないために（被験者全員が未婚者）、最も身近な絆関係であると思われる母子関係においても、その受動的な捉え方が脆さを抱えている可能性が示唆された。これから青年期後半に突入し、母親との過去に例のない葛藤が生じた場合、既存の母子関係に何らかの変容が訪れても不思議ではない。また、若干ながら父親との不仲が自由記述に触れられており、父子間の絆関係も探求する必要がある。女子学生の被調査者がペアデータの8割を占めたことも、結果の一般化において今後の課題といえる。

また、母子関係における母と子の視点の違いも検討事項である。青年群の場合、母子の絆とは、程度は別として、生まれてきた時には既に存在するものであるのに対し、大人群、特に女性の場合、「実母との絆」、そして「実子との絆」が対象となることから、受動的な絆と能動的な絆の双方を長年にわたって経験してきた大人群の絆に対する考えは非常に興味深く、これらの差異は今後の研究で明らかにする必要があるだろう。

総合考察

本論文では、人々の中に内在化された「絆」についてのイメージや他者と絆で結ばれることに対する態度を検討し、母子間における「絆」の構造を明らかにすることを試みた。そして、「絆」に対する態度の構成要素と母子関係の満足度との関係を検討することを通じて、母子関係における「絆」の内部関連構造を導き出すことに成功した。また、確認された構造の中でも、「絆」形成にとっての肯定的な情緒的先行要件と「絆」の自然発生的な安定性認識が母子間の関係満足度を支えており、そこから母子間の確固たる信頼関係が暗示された。しかし、絆は母子関係以外でも生じる可能性があり、「絆」の複合的な実態をより総括的に把握するためにも、父子関係を含む異なる関係性の検討が必要であろう。

さらに、実証的な研究のためにも、尺度の信頼性向上に向けて再検査を実施し、尺度の構成概念妥当性を検討し、類似概念との関連性を検証することが今後の重要な課題といえよう。

類似概念である愛着との関連性についてはさらなる検討が必要である。それは、発達心理学における愛着とは、もともと母親を安全基地とした場合の幼児の行動反応とその範囲、あるいは“潜在的危機における負債感を伴う近接性⁴”（田中他, 2005）であるのに対し、本研究での「絆」とは、情緒性や価値観を伴う態度でしかないからである。もちろん愛着にも基本的信頼にともなう情緒的なつながりという側面があるが、「絆」が愛着に見られるような行動的指標を含むとは現状ではいい難い。そういった懸念から、愛着との関連を明示する上で、さらなる概念化の作業が必要といえる。

そこで、「絆」の概念化への今後の展開に向けて、日本文化に独特とされる「甘え」の存在に着目してみたい。土居（1971, 1993）は、愛着と甘えの類似性を唱えており、独自のダイナミックスを提示している。これによると、甘えとは愛着と依存をつなぐ役目を担うものであり、2つの異なる概念を結合させる効果をもつとされている（栗山, 2002）。愛着には、Harlow & Mears（1979, 梶田訳 1985）にも代表されるように身体的接触が重要である。同様に、子どもからの体での甘え（e.g., 添い寝）を十分受け入れることが子どもの情緒安定と思いやり発達において重要であり、しいては親子間の心の絆の成立に役立つとされている（平井, 1994）。つまり、愛着を形成するには、親子間の密接な係わり合いが大切であり、子どもからの甘え行動を受容し、「甘え-甘えられる」関係が成立することで成し遂げられるというのである。このようなダイナミックスに直接「絆」の概念を組み込むことは容易ではないが、少なくとも「絆」も甘えもその概念が文化に内在化されている点では共通といえよう。甘えが愛着と依存の架け橋であるように、また、人々が共有する「絆=線」といった視覚的イメージから推察するに、「絆」とは、人と人との「つながり」を定義するための「シンボル」なのではないだろうか。人と人との「絆」が媒介し、関係性を成立させているのである。そして、個々人の関係性のつながり状態を「絆」に付随する文化的規範に当てはめて評価した結果が、それぞれの関係性に対する「絆のイメージ・態度」なのである。

また、「夫婦も元は他人」や「兄弟は他人の始まり」といった諺と比較すると、親子関係は実に特殊であり、その関係こそが絶対的であるという考えを人はもっている（土井, 1993）。そのために、一般的に親子関係には愛着が形成されやすく、「絆」も構築されやす

4. 日本社会心理学会第46回大会のワークショップにおいてパネリストらから発言された内容である。

い。しかし、血縁関係のみにあらず、親密な他者との関係においても、そこにつながりを確信できる関係（e.g., 甘え－甘えられる関係）が存在するならば、「絆」の構築も可能なのではないか。

「絆」がある（またはない）といった静的な理解に留まらず、「絆」の構築という動的、発達のかつ社会的観点から、愛着、甘え等の周辺概念をより包括的に整理することも今後の課題といえよう。

参考文献

- Bartholomew, K., & Perlman, D. (Eds) (1994). Attachment Processes in Adulthood: Volume 5. Advances in Personal Relationships. London: Jessica Kingsley.
- Bowlby, J. (1969). Attachment: Attachment and loss series, No.1. Basic books. 黒田実郎ほか（訳）1977 母子関係の理論1 愛着行動, 岩崎学術出版社.
- Dilalla, L. F. (2000). Structural Equation Modeling: Uses and Issues. In H. E. A Tinsley & S. D. Brown (Eds.) , Handbook of Applied Multivariate Statistics and Mathematical Modeling (439-464). New York, NY: Academic Press.
- 遠藤利彦 (2002). 第3章 人生の出発: 発達の基礎としての愛着 (pp.40-56), 小嶋秀夫・やまだようこ (編), 生涯発達心理学, 放送大学教育振興会.
- Erikson, E. (1963). Childhood and Society. 仁科弥生(訳) 1977 幼児期と社会, みすず書房.
- 土居健朗 (1971). 「甘えの構造」, 弘文堂.
- 土井健朗 (1993). 注釈「甘えの構造」, 弘文堂.
- Feeney, J., & Noller, P. (1996). Adult Attachment. California: Sage.
- 平井信義 (1994). 親子関係の今日的状況－親子の「心の絆」はいま, 児童心理, 48, 3-9.
- Harlow, H. F., & Mears, C. (1979). The human model: primate perspectives. 梶田正巳 (訳) 1985 ヒューマン・モデル: サルの学習と愛情, 黎明書房.
- Hirschi, T. (1969). Causes of delinquency. 森田洋司・清水新二 (監訳) 1995 非行の原因－家庭・学校・社会へのつながりをもとめて, 文化書房博文社.
- 伊藤美奈子・宮下一博 (2004). 傷つけ傷つく青少年の心－関係性の病理 発達臨床心理学的考察, 北大路書房.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003). 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響, 社会心理学研究, 19, 59-76.
- 柏木恵子 (2003). 家族心理学－社会変動・発達・ジェンダーの視点－, 東京大学出版会.
- 河合隼雄 (1980). 家族を考える, 講談社.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法, 中央公論新社.
- 北村琴美・武藤隆 (2001). 成人の娘の心理的適応と母娘関係: 娘の結婚・出産というライフイベントに着目して, 発達心理学研究, 12, 46-57.
- 小林京子 (1993). 逸脱行動と社会的絆の強さの関係について－相互作用的地の見地のからの検討－, 犯罪心理学研究, 31, 39-48.
- 厚生労働省 (2003). 平成15年度 福祉行政報告例.

- 栗山直子 (2002). 第10章 母子関係 (pp.209-230), 畠中宗一 (編) 自立と甘えの社会学, 世界思想社.
- 水野－島谷いずみ (2002). 日本における成人期の母娘関係の概念枠組みと測定尺度－都市在住の女性を対象にした分析－, 社会心理学研究, 18, 25-38.
- Rothbaum, F., Weisz, J., Pott, M., Miyake, K., & Morelli, G. (2000b). Attachment and Culture: Security in the United States and Japan. *American Psychologist*, 55, 1093-1104.
- Rothbaum, F., Pott, M., Azuma, H., Miyake, K., & Weisz, J. (2000a). The Development of Close Relationships in Japan and the United States: Paths of Symbiotic Harmony and Generative tension. *Child Development*, 71, 1121-1142.
- 斉藤知範 (2002). 非行的な仲間との接触, 社会的ボンドと非行行動－分化的強化仮説と社会的コントロール理論の検証－, 教育社会学研究, 71, 131-150.
- 酒井厚 (2005). 対人的信頼感の発達：児童期から青年期へ, 川島書店.
- 品川浩三 (1992). 第3章 心の問題の理解と対応 第1節 愛着障害のかたちをとるもの (pp.49-55), 品川浩三 (編) 精神保健, 北大路書房.
- Sperling, M. B., & Berman, W. H. (1994). *Attachment in Adults: Clinical and Developmental Perspective*. New York: Guilford Press.
- 高橋道子 (1984). 第1章 親子関係の成立 (pp.61-88), 岡弘子, 小倉清, 上出弘之, 福田垂穂 (編) 親子関係の理論1－成立と発達－, 岩崎学術出版社.
- 田中優・谷口弘一・遠藤利彦・金政祐司・岩尾良徳・戸田弘二 (2005). 成人アタッチメント研究の最近の動向－これまで何が分かって, これから何ができるのか?－, 日本社会心理学会第46回大会ワークショップ.
- 山口修司 (1994). 第9章 情緒の発達 (pp.135-148), 今泉信人・南博文 (編) 発達心理学, 北大路書房.

－2005.11.29受稿－

付 録

Table.1 KJ法による「絆」イメージの分類

第1分類 (大人)		第1分類 (青年)		第2分類	大 青	第3分類	大 青
信頼・信頼感・信頼関係	24	信頼・信頼感・信頼関係	56	信頼	32 70	絆関係に	79 161
相互信頼	2	信じる	7			伴う情緒性	(26.2%)
人との信頼	2	信頼できるか否か	1			(群内の割合)	
信じ合うこと	1	信頼関係の証	1				
心を信じ合う	1	言葉のいらない信頼	1				
うそがない	1	信じられている実感	1				
疑いのない	1	無条件に信頼	1				
		信じ合える強さ	1				
		あると信じたい	1				
愛・愛情	13	愛情・愛情関係	21	愛情	25 23		
無償の愛	5	関わりが深い人との愛	1				
愛を育む	1	無条件の愛	1				
愛で包み込むもの	1						
本能的な愛	1						
愛着の念	1						
見返りを求めない愛情	1						
親子の無償の愛	1						
夫婦間における愛と理解	1						
		友情・友人関係	24	友情	24		
感情	1			感情	1		
		情	2	情	2		
安心感	2	安心・安心感	6	安心感	3 8		
安心しきった関係	1	結ぶと安心	1				
		あると安心	1				
思いやり・思いやる心	7	思いやり	14	思いやり	10 17		
ほうっておきない	1	やさしさ	2				
やさしさ	1	あたたかい	1				
大切に思う	1						
相手を尊敬	2	尊敬	2	尊敬	3 2		
相手の長所を見る	1						
失いたくない関係	1	失うと喪失感	1	失いたくない	3 4		
失いたくない気持ち	1	無いと不安	1				
永遠に切りたくない	1	途切れるのは嫌	1				
		絶つと不快	1				
		相手が嬉しいと自分も嬉しい	1	快感情	4		
		一緒にいてうれしい	1				
		仲良く	1				
		守ることが喜び	1				
愛憎	1	時にはわずらわしい	1	負の感情	2 2		
憎しみ	1	築くのは怖い	1				
		照れくさい	1	その他	5		
		無意識な感情	1				
		何らかの感情で結ばれる	1				
		好き嫌いとは別	1				
		好きなだけではだめ	1				

「絆」の光と影（高木・戸口）

第1分類 (大人)	第1分類 (青年)	第2分類	大 青	第3分類	大 青
強い 硬いもの 心の奥深くに存在	2 固い 1 深い 1 強い 壊れ難い	7 強さ 2 3 1	4 13	絆関係自身の 特性イメージ (群内の割合)	88 279 (45.4%)
目に見えない 無意識	4 目には見えない 1 言葉じゃない 形ではあらわせない あるかわからない 意識しないと気付かない 忘れやすい 普段は考慮しない 気付き・気付いて分かる 存在しているようでしていない	18 1 1 1 1 1 1 3 1	見え ない 5 28		
距離は関係ない 離れていてもよい 遠くてもよい	1 距離は関係ない 1 離れていてもつながる・切れない 1 適切な距離感を保つ 離れたり近くなったりする	9 3 1 1	距離関係 なし 距離その 他 3 12 2		
	時間や空間では測れない 長期間会えなくても消失しない 時間的経過を超越する	1 1 1	時間 3		
	変動する (時間・対象) 不安定	3 1	変動 4		
時間がかかる 年月をかける 積み重ね 努力と年月が必要	1 築くのは難しい・得がたい・ 簡単にできない 1 時間がかかる 1 会う回数に比例 1 作り上げる・築き上げる	4 6 1 1	時間が かかる 4 12		
	永遠・いつまでも続く 崩れないもの 容易に変わらない 簡単には解消されない なくなる 固く結ばれている 消えない	4 1 1 1 1 1 1	永遠 10		
切っても切れない 切れない 断ち切れない 切りたくても切れない 絶つことができないつながり 普遍的なもの	5 切っても切れない 5 切れない 2 壊れない 1 切れないつながり・縁 1 腐れ縁 1	12 24 7 2 1	切れない 15 46		
自分では選べない 逃れられない関係 自分ではどうしようもできない	1 1 1		自分では 選べない 3		
	相互努力 努力して築く 理解し合おうと努力	2 3 1	努力 6		

第1分類 (大人)		第1分類 (青年)		第2分類	大 青	第3分類	大 青
損得なし	1			損得なし	6		
利害なし	1						
利害、上下関係を越える	1						
利害を無視できる関係	1						
無形の財産	1						
お金やものではない	1						
つながり	6	つながり	31	つながり	16	56	
人とのつながり	1	心のつながり	5				
深いつながり	2	人とのつながり	4				
緊密	1	人ともとのつながり	1				
家族の心のつながり	1	切れないつながり	2				
つながりのよい関係	1	どこかでつながっている	1				
親密関係	1	つながっている感覚	1				
人との関係	1	網羅万象とのつながり	1				
人との交流	1	架け橋	1				
親と子の間をつなぐもの	1	感情でのつながり	1				
		つなげようとがんばる	1				
		意識しなくてもよいつながり	1				
		見えない所でつながる	1				
		気持ち上のつながり	1				
		深い感情的なつながり	1				
		生まれる前からの人・物とのつながり	1				
		ある媒体によってつながったもの	1				
		ある種の連帯感	1				
結びつき	6	結びつき	13	結びつき	10	29	
親と子を結ぶ	1	結束	2				
心を結ぶ架け橋	1	深い・強い結びつき	4				
結びつきのための共通なもの	1	愛のある結びつき	1				
他人では接点の多さ	1	運命の結びつき	1				
		互いを心的に結びつける	2				
		相手と深い所で結ばれる	1				
		人と人を結ぶ	1				
		一緒に結ばれる	1				
		無意識の中で結ばれるもの	1				
		気持ちの結びつき	1				
		意識上の連結間	1				
有意義なネットワーク	1			ネットワーク	2		
自分で作るネットワーク	1						
縁	1			縁	8		
腐れ縁	3						
他人との縁	1						
断ち切れない縁	1						
契約とは異なる	1						
契り	1						
		固く見えない糸・赤い糸・心の糸	3	糸	4		
		心を結ぶ蜘蛛の糸	1				
		運命	3	運命	4		
		意思とは無関係	1				

「絆」の光と影（高木・戸口）

第1分類 (大人)		第1分類 (青年)	第2分類	大 青	第3分類	大	青
		自然的 1	自然	3			
		自然につながる 1					
		作るものではなくできるもの 1					
		神聖 2	神聖	2			
生きていく上で必要	2	生きる上で必要	2	必要	7	6	
必要不可欠	2	生命維持に必要不可欠	1				
生きていく底力	1	人間が希求する	1				
心の支え	1	誰もが求める	1				
幸福な生活に必要	1	自分が自分らしく生きるために必要不可欠	1				
		大切なもの 10	大切	16			
		かけがえのない 2					
		宝・一生の財産 2					
		軽視はだめ 1					
		すばらしいと思われている 1					
どろどろしたもの	1	修復は難しい	1	負のイメージ	5	7	
運命と誤解	1	永遠・絶対ではない	1				
強いと難しい	1	現代社会において失われそう	1				
切れやすい	1	修復不可能	1				
けがれたもの	1	壊れやすい	1				
		もろい 1					
		さびる 1					
		生まれもってある 1	その他	16			
		誰からみても明らか 1					
		精神的な基盤 1					
		心理的なもの 1					
		他人には踏み込めない 1					
		見えないようで見えるもの 1					
		普通はよい文脈 1					
		両義的な性質 1					
		性別・年齢関係なし 1					
		絶対的なもの 1					
		排他的になる 1					
		なれ合い 1					
		仰々しい 1					
		再生が容易 1					
		古いもの 1					
		他者と共有 1					
血縁	7	血縁関係・血のつながり	10	血縁	15	12	
血のつながり	6	へその緒	1				
親子間における血のつながり	1	血のつながりとか関係ない	1				
身内では血のつながり	1						
家族	6	家族	13	家族	13	19	
兄弟姉妹	2	親子	6				
夫婦	2						
子	1						
親子	1						
親族	1						
		恋人	3	恋人	3		

絆関係が
成立する場合
(群内の割合)

36 55
(8.9%)

第1分類 (大人)		第1分類 (青年)		第2分類	大 青	第3分類	大 青
友情・友人・親友・仲間	6	人間関係	6	関係性	8 25		
師弟関係	1	親密な関係	5				
生まれたときからの関係	1	切れない関係	1				
		無償の人	1				
		人と人との間	1				
		長期的関係	1				
		人生で多く関わりを持つものとの関係	1				
		自分の死を悲しむ人との関係	1				
		身を任せられる関係	1				
		心から大切な人との間	1				
		信じ合える人間関係	1				
		関係の深さ	1				
		簡単には壊れない関係	1				
		少なくとも嫌いではない関係	1				
		心許す相手との間	1				
		同じ価値観を持つもの同士の関係	1				
		利益関係	2	利益関係	2		
相互理解	2	理解	2	理解	2 12	絆関係の 有り様 (群内の割合)	44 108 (17.6%)
		相互理解	3				
		気持ちの理解	1				
		相手の理解	2				
		分かり合い	2				
		長所短所を分かり合う	1				
		長所短所を認める	1				
一体感	2	お互いを必要・大切	6	相互	9 17		
相互励まし	1	互いを熟知	1				
束縛されない	1	一体感	1				
傷つけ合わない	1	相手を自分の一部だと思う	1				
共に学び合うこと	1	相手のことを考えて力がわく	1				
相互に必要とされる	1	相手がいるから自分がある	1				
責任分担	1	お互いの気持ちが大事	1				
支え合う	1	相手の立場に立つ	1				
		互いに利用できる	1				
		関わり合い	1				
		一方ではなく双方	1				
		相互の姿勢によって維持	1				
受容	2	自分の裏切りを許してくれる	1	受容	8 3		
許し合う	2	それがあれば許せる	1				
心を許せる相手、動物	1	失敗しても許してくれる	1				
全てを受け入れること	1						
許せる心	1						
認め合いわがまを許せる仲	1						
		裏切りへの恐れ・弱い	2	裏切り	3		
		決して裏切らない	1				
助け合い・協力・援助	4	助け合い	12	援助	4 17		
		悲しみを分け合う	1				
		困った時に助け合う	1				
		経済的援助	1				
		有事の際、助け合う	1				
		痛みに気付く	1				

「絆」の光と影（高木・戸口）

第1分類（大人）	第1分類（青年）	第2分類	大	青	第3分類	大	青
	頼れる	2 頼る		3			
	精神的な依存	1					
苦楽を共にする	3 困難共有	1 苦楽を	5	7			
喜びと悲しみの共有	1 喜怒哀楽の受け入れ	1 共にする					
喜怒哀楽	1 苦楽を共に	1					
	困難も乗り越えられる	1					
	困難を乗り越えたもの同士	1					
	苦しいことを共に乗り越える	1					
	苦難の際に相手を思い出す	1					
共に住む	1	共に住む	4				
共に生活	1						
生活の仲から	1						
同環境	1						
	一緒にいたい・嬉しい	2 一緒		4			
	時間の共有	1					
	群れること	1					
	心のよりどころ	1 場所		3			
	居心地のよい場所	1					
	戻れる場所	1					
コミュニケーション	1 本音で言い合う・付き合い	4 コミュニ	3	11			
話し合える	1 発言	1 ケーション					
自己開示を伴う	1 自分の長所短所を見せられる	1					
	相談にのる・できる	4					
	沈黙が可能	1					
	支え合う	2 支え		4			
	心の支え	1					
	生きてゆく支え	1					
言葉がいらない	1 以心伝心	6 言葉が不要	3	11			
口に出さない	1 言葉無くても通じ合う	1					
気持ちが通じ合う	1 心が通じ合う	4					
同じ目標を持つ・向かう	2 同じ目標同士の信頼感	1 目標	6	2			
同じ価値観	1 目標に向かって頑張る	1					
同じ志	1						
同じ思想	1						
一つのことを成し遂げる	1						
	生活から生まれる	1 絆のきっかけ		4			
	共通の経験により生まれる	1					
	長い付き合いから	1					
	一つの大きな出来事で結ばれる	1					
	何よりも優先	2 その他		7			
	いざというときに大事	1					
	いざというときに力を発揮	1					
	1人ではなしえないことができる	1					
	お互いを忘れないこと	1					
	悪意を持たずに尽くせる	1					

第1分類 (大人)		第1分類 (青年)		第2分類	大	青	第3分類	大	青
自分より優先	1	自己犠牲	3	他者優先	7	5	絆関係と自己 の関わり方 (群内の割合)	7	12
自分を与え合う	1	利他的	1						
自己愛ではない	1	何かしてあげたい	1						
相手の立場で考える	1								
心配する	1								
相手に配慮	1								
人のための心	1								
		自分だけが知りえるもの	1	自己中心性	7				
		思い込み	1						
		自分の糧	1						
		自分次第	1						
		自分のことを想起	1						
		アイデンティティを左右	1						
		自己確認ができる	1						